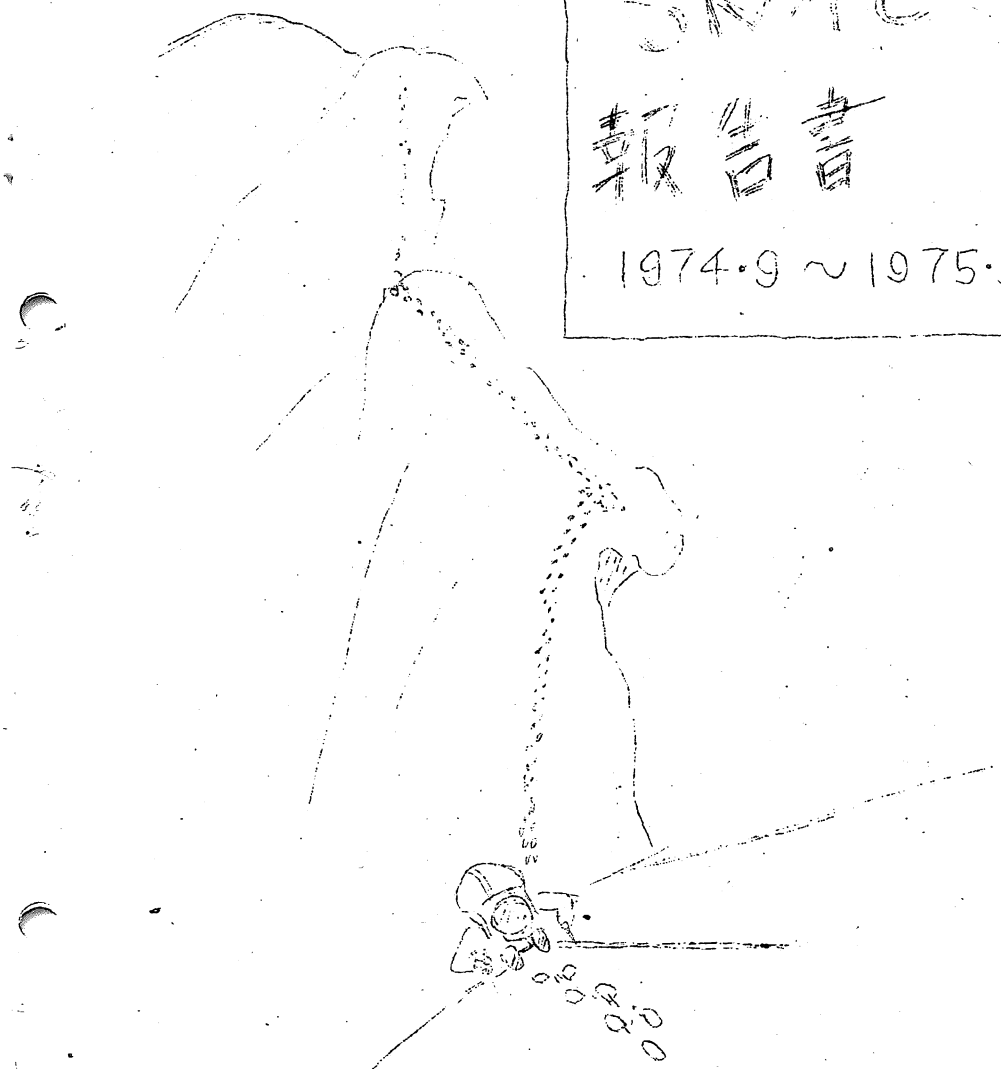
SMAC
報告書

1974・9 ～ 1975・5



信州大学山岳会長野山岳部

昨年夏山報告書を出して以来報告書の類は全く出されていなかった訳である。春山も終え、メンバーも新しくなり、連休山行まで終わった今ごろになって、やっと重い腰をあげることになった。ここに報告するのは1974年9月～1975年5月の間に行なった、合宿、個人山行の全部である。

目示

☆合宿

1. 涸沢定着 —74.9～10— 1page～
2. プレ冬・八ヶ岳 74・12 5
3. 穂高北尾根～奥穂 74・12（冬山） 7
4. 剣岳 75・3（春山） 13
5. 不帰東面 75・4～5 19

☆個人山行

1. 野呂川 74.10 21
2. 裾花川 74・10 22
3. 明星山 74.10 23

☆荷上げ

1. 前穂 74.11 26
2. 剣・三の窓 74.11 26

1。涸沢定着

当初、夏山合宿における管理された山行に嫌気の[illegible]さしていた部員を中心として、秋山は個人山行という[illegible]意見が強かった。しかし夏休み明けの一ケ月間では、これ[illegible]といった具体的な計画も出ないまま、前期試験が近づ[illegible]き、不本意ながら、全員、涸沢にて岩登りをするという計[illegible]画に参加することになった。半ば合宿めいた形となった[illegible]わけである。

○ 参加者

CL. 古川道裕（工・工化2.Ⅲ）　SL. 西川義満（工.土木3.Ⅳ）

川瀬亨（工.土木2.Ⅱ）　宅和正彦（工.合化2.Ⅱ）

福井修（工.土木3.Ⅰ）　山本章（教.小社.1.Ⅰ）

IMの.豊田信行（農.2）　元部員.菊池宮人（工.電気2）

○ 期間

1974.9.29 ～ 1974.10.6

○ 行動記録

9月29日　曇り → 晴

試験を早く終えた西川、宅和、山本の三名で松本から涸沢に入る。先に入山していた伊那・松本の二張のテントの前にツェルトを張る。

9月30日　快晴

又白へ行くIMパーティから新人の横山をトレードし、滝谷へ向う。北ホ小屋に届を出し、二パーティでB沢に入る。

クラック尾根（西川、横山）

ホー尾根（宅和、山本）

両パーティ終了後、山本、横山は涸沢に下る。

北ホチムニー（西川、宅和）

当初ダイヤモンドフェースルートを予定していたが、初日ということで調子出ず、滝谷の寒さに体も冷れず、チムニーで遊ぶ。

10月1日　小雨→曇り

早朝キリションがふっている。IM下山後、彼らの残してくれたテントに移動。8時ごろ雨がやんで又白へ行くことにする。この日より豊田が加わる。四Pのコルから C沢を経て、2パーティーで右岩稜に取りつく。

古川ルート（宅和、山本）

鵬翔ルート（西川、豊田）

北尾根を縦走して来た3人パーティが去ったあとの第ホピークは、最早夏のにぎわいがウソのように感じられる。何も落ちていず、早々と引きあげる。四Pのコルから BCへ。

17時ごろになって、古川、川瀬、福井、菊池が入山

10月2日　曇りのち晴れ間もでる

今日も早朝はキリションで明ける。すぐにあかり、7時ごろから行動を始める。又白と屏風岩に分かれて涸沢を出発。

右岩稜古川ルート（古川、川瀬）

四峰 松高ルート（宏和、山本、福井）

屏風岩 中央壁 岐阜登高会ルート（西川、豊田）

登るにつれてだんへ晴れ間も見えるようになる。中央壁は夏にはいまいち見映えがしないが秋は紅葉の中をぐんへサイルが延びてなかなか楽しませてくれる。

菊池は洞沢にて休養。

10月3日　雨のち曇り

朝から雨が降っている。仕方がないので酒を飲んで時間を費す。10時ごろになって雨があがると同時に、酒の酔いにまかせて北ホへ向う。酒ぐさい息をはきながらの南稜はとてもこたえる。小屋に福与氏より預かったウイスキーを届け、お茶をご馳になる。その後時間もないのでドームの北壁を2パーティで登る。菊池は洞沢へ。

右ルート（西川、福井）

左ルート（古川、川瀬）

どちらも1ピッチ少々のものであるが、ガスの中アブミが乱に舞い結構楽しませてもらう。

宏和、山本は終日沈殿、豊田は下山。

10月4日　雨

まったくよく降る雨である。沈殿して飲む。

10月5日　晴れ

新人2名、(山本、福井)は北本東稜～芳本へ、二年生以上でBフェースへ行く。

田山ルート～都立大へ（古川、宮和）

都立大ルート　　（西川、川瀬）

芳本で全員合流し、北尾根をVVのコルまで歩いて、BCに帰えり、飲む。

10月6日　快晴

予定ではあと一日残っているが、里心がついてしまい、下山する。

2。アプレ冬山・八ヶ岳　74.12

○参加者

CL. 古川直裕　SL. 川瀬亨

加賀瀬豊彦　野口彰　西川義満　宅和正彦

福井修　山本章

○期間　1974.12.1 ～ 1974.12.6

○行動記録

12月1日　晴れのち曇り

先発として、加賀瀬、西川、古川、宅和、山本の4名で入山、行者小屋下にBC設営。雪は非常に少ない。

12月2日　晴れのち雪

BCを6時半発、全員で赤岳ショルダーに行く。加。古。山は左、西、宅が右を目指す。左は一度もアンザイレンせずに抜けてしまう。右は赤岳沢から入るが下部のハング気味の岩を登れず左のルンゼから左リッジに抜ける。その後全員地蔵尾根下降。午後は阿弥陀方面にラッセルに行くが雪不足。
後発の野口、川瀬、福井が入山

12月3日　雪、決断、古川、山本　中山乗越まで散歩。

12月4日　曇りのち小雪
BC 6時発、阿弥陀北稜に全員で行く　末端から登り出し、殆んどノやっこさをさせられる。上部でfix練習。あとは赤岳まで歩き、地蔵尾根北側のルンゼを下降する。急でクラストしてたり下ピーン歩行の練習になる。途中fix 20m、滝のア

プガイレン100m程、20mが滝の下から地蔵尾根に逃げる。

12月5日　曇り時々晴

BC6時発、石尊稜から積雪に行く予定であったが、かすかがりていて どれが石尊稜か分らず、小同心右稜を登ってしまう。fix練習しながら、小同心下まで行くが、そこで引き返す。全員で行動していたので時間切れとなったのである。

12月6日　曇り

BC撤収、下山。

3。穂高.北尾根～奥穂

'74、冬山合宿

冬山を穂高でという案は年度初めからあった。夏山を終えた時点で、北尾根～西穂縦走と同時に右岩稜の登攀という欲ばった計画が具体化してきた。秋に涸沢に入り、11月には新穂に荷上げを済ませた。しかしプロ冬山に於て、新人訓練と上級生の登攀訓練を同時に行うことが出来ず、結局右岩稜を捨った縦走だけの計画で入山したわけである。

○参加者

CL. 西川義満 (工.4)　　SL 古川道裕 (工.3)
加賀瀬豊彦 (工.5)　　野口 彰 (工.5)
川瀬 亨 (工.2)　　宮和正彦 (工.2)
福井 修 (工.1)　　山本 章 (教.1)

○期間

1974.12.22 ～1974.12.31

○行動記録

12月22日　快晴

・松本部屋 (5:00) ―― 新山吹遂道 (6:00) ―― 不村小屋 (10:30)
新村橋 (14:20)

マイクロバスで山吹トンネルまで入れ、そこから先も徐沢までしっかりしたトレースがあり楽に入山することが出来た。北岳は我々が一番のりである。

12月23日　快晴

T.S(7:30) — 慶応尾根の鞍部(9:00) — 2460m (14:30)

雪が安定していたので本谷をかなり上部まで進み、直接慶応尾根の鞍部に出る。ここまでのラッセルは膝ぐらい。これより尾根に急でやせており、ラッセルも腰の深さとなる。八峰のすぐ手前2460mのコル状に設営。古川、川瀬で八峰の先へ50m fixをする。

12月24日　雪

沈殿

12月25日　雪のち曇り

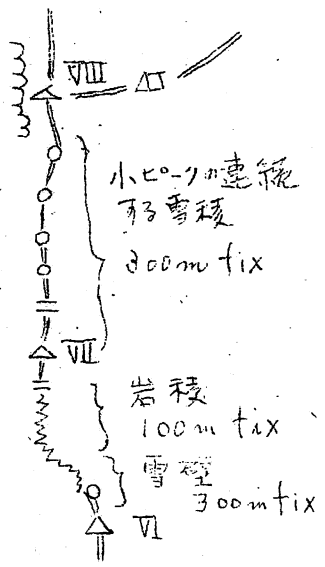
沈殿

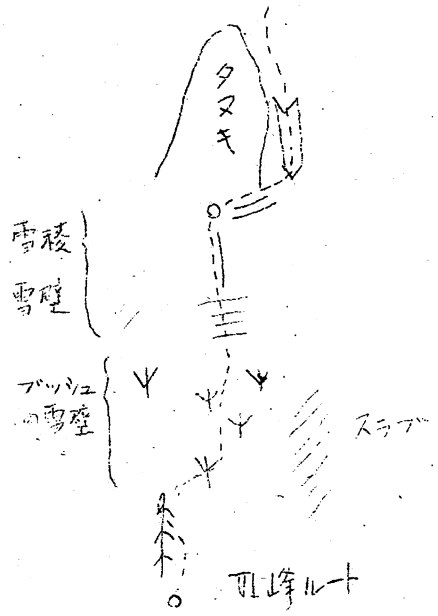
12月26日　曇りのち晴れ

T.S(7:30) — Ⅷ峰(8:15) — Ⅶ峰(10:00) — Ⅵのコル(15:00)

Ⅷ峰から九は、加賀瀬一川がfixザイルを全部持って先行し、全員通過後、野口、西川で回収してそのつど先頭に戻していく方法で進む。Ⅶ峰にかけての雪稜は膝ぐらいのラッセル。Ⅵ峰へは稜上をたどり、タヌキ下のブッシュの雪壁から雪稜、タヌキの洞沢側を巻いて凹

状雪壁からⅡ峰に出る。Ⅶのコルに設営。

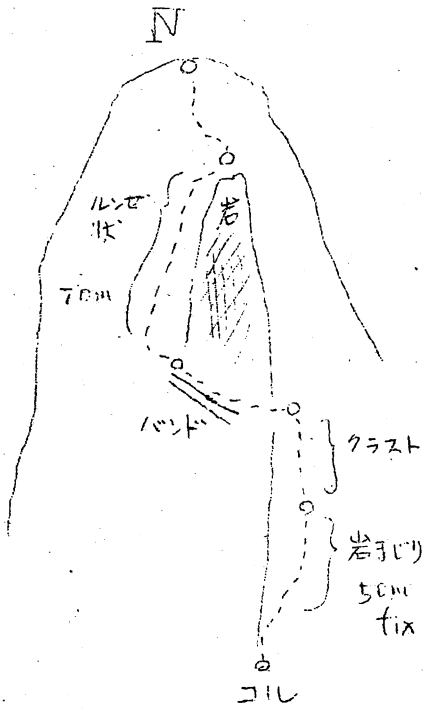




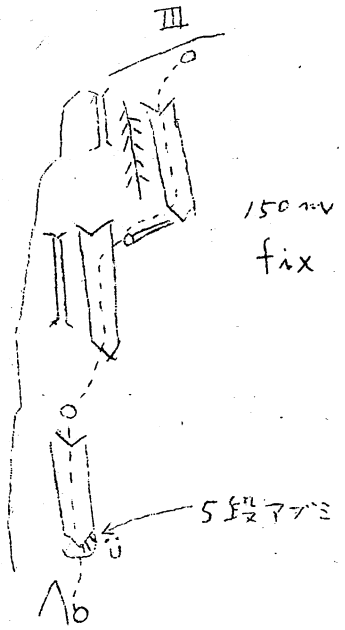
12月27日　晴れ

T.S (8:00) —— Ⅳ Ⅴコル (7:20) —— Ⅲ・Ⅳコル (12:30)
fix party 帰天 (16:30)

昨日設営時に追い越して行った同志会のトレースが有り、Ⅴ峰まではスムーズに行ける。80m fixしてコルに下ると、同志会のトレースは口沢についており、Ⅳ峰はまた我々でルート工作することになる。最初100mは岩まじりからカチカチのクラスト、岩峰を又自側を巻いて凹状部から再び稜線に戻るまでの間は崩れそうな雪である。全員Ⅲ・Ⅳのコルに集結後、二名でⅢ峰のfixに向うが時間をくいそうなのでコルに設営する。Ⅲ峰は2P 80m fixしたところで引き返す。この日伊那・松本の4名が我々のトレースを利用してⅧ峰から一日で追いついてくる。



Ⅳ峰ルート



Ⅲ峰ルート

12月28日　高曇り

T.S(8:00) —— Ⅲ峰(12:00) —— 前穂(13:30)

I・Hの溝辺・吉田が昨日の続きにフロフル fix。荷物をキスリングとサブザックの2個に分け、図中の○印点に3名ずつ配置して、6mmロープでつり上げる。Ⅲ峰からピークまでダブル。Ⅱ峰に30m fix。ピーク南端に12人用の雪洞を掘る。1時間半を要す。また2mの雪の下からデポを回収。

12月29日　曇りのち風雪

前穂(9:00) —— 最低コル(10:30) —— 奥穂(12:05)
(15:00)

IMの出発後デポを整理し7日分だけ持って後を追う。最低コルを強風で吹き出し すぐに目を開けていられないぐらいになる。稜線通しに進むが視界がきかないので確かとしてはかどらず、南稜の頭に出る雪壁では一時的に白メシラになる。雪庇に気をくばりながら涸沢側に寄って泳ぐようにして上に出る。つい先程通過したIMのトレースも残っていない。奥穂のケルンにつくや即白出のコルに下ろうとするが どこをどう間違えたか涸沢側のリッジに迷い込んでしまい。同じ所を下りたり登ったり。ついに下降を断念し奥穂に戻って雪洞を掘る。鉄化面のように凍りついた白出帽を脱ぐのに一苦労する。

12月30日　曇りのち雪

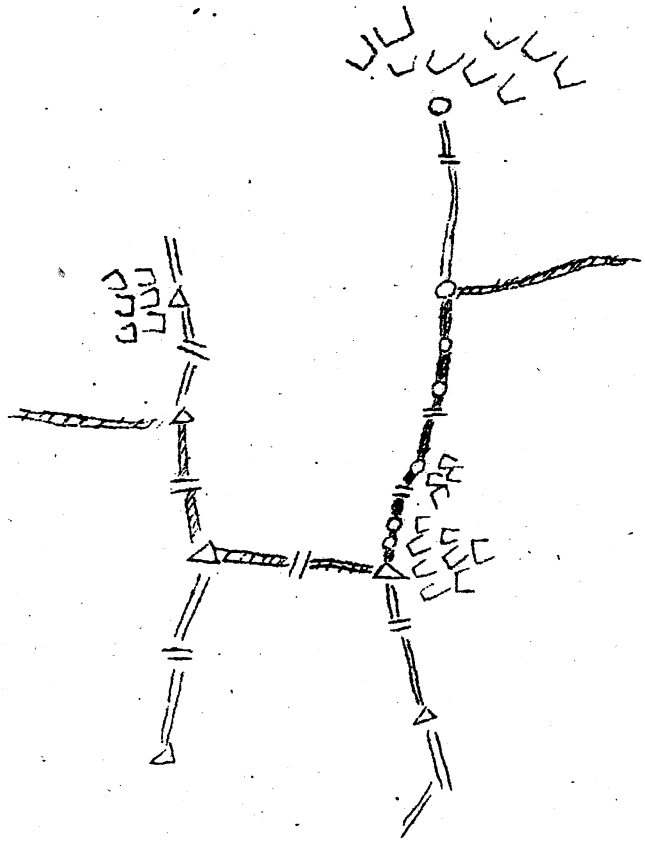
奥穂(10:00) ——— 白出の冬期小屋(11:00)

奥穂アタックに来たIMの連中の声に雪洞を飛び出し、走るようにして白出のコルへと下る。視界があると何ともない所である。小屋の奥を郭どり 休養する。

12月31日　快晴

小屋(8:00) —— 蒲田富士(9:30) — 白出沢出合(12:30)
新穂温泉(14:00) 解散

昨年・凍傷をやった所がまたやられ、重くならないうちにと、
途中下山とする。湯沢岳西尾根口完全なトレースがつ
いており、どんどん シャバに近づく。新穂高温泉で
解散する。



4。剣岳・春山合宿　1975.3.

小窓尾根～小窓ノ頭～八峰～早月尾根下山

このところ数年、春山は冬山に比して、一段レベルの低い山行が行われていたように思える。新メンバーに変わることからそれも無理からぬことだろうが。今年度の計画は冬山と同じく、夏山終る時から出だしたもので、なんとか当初の案をくずすことなく実行のはこびとなった訳である。なにぶんにも積雪期に壁を登ったりするのは初めてという人間ばかりで、いくぶんためらいもあったのだが、そこはそれ、おちぶれたりとはいえ、困難に立ち向おうとする心構えだけは、ちゃんと持ち合わせている若人の集まりであるから、なんとしても、石にかじりついても、やりとげようという、実に見上げた心意気が最後まで、がっちに当初のハッタリめいた案を守りぬいて、今回の春山となった訳である。

○参加者

CL、古川道裕（工.Ⅲ）　SL、西川義則（工.Ⅳ）

川瀬、亨（工、Ⅱ）　宮和正彦（工.Ⅱ）

福井　修（工.Ⅰ）　山本　章（教.Ⅰ）

○期間

1975.3.14～1975.3.24

○行動記録

3月14日

夕刻、長野を発ち魚津へ。Stationビバークをしようとしているところへ富山県警の北山氏が現れ、氏の好意で、自宅に泊めていただく。

3月15日　晴れ

北山氏宅で朝食をごちそうになり、元気よく出発。伊折から先ちゃんとしたトレースがあり、8P半で馬場島。届けを済ませ、白萩川に入り、取入口で雪洞を掘る。

3月16日　晴れのち曇り

S.H.1 (6:30) ——小窓尾根取付(7:20) ——1600 (8:50)
1900mv (10:20)

トレースがあるのでアイゼンで行く。高巻きはせず谷通しで進む。トレースが池の沿にも入っている。小窓尾根の登りは胸のつかえる程の急登である。夏よりも早く上ってしまう。1900m地点にはずい分早くついたが、これより先尾根はやせてくるので今日はここに雪洞を掘る。

3月17日　曇り→雪

SH.2 (6:30) ——ニードル (8:30) —ドーム(10:20) —マッチ箱 (13:00)
三の窓(14:30)

稜線はやせはじめる。西側、定和でまのいがイルを拾って要所要所fixして行く。ニードルの登りから小窓の頭に出るまでトレースはついているものがfixを必要とする所が次から次と現れ気をぬけない。頭に出るころより雪が舞いだす。小窓の王のトラバースにはfixがイルが残されており、三の窓に

下降。ジャンダルム方向の雪面に東向きに大きな雪洞、SH3、を堀る。

3月18日　吹雪→⓪→①
午前中、弱い吹雪で雪洞内でデポの整理などして休養にあてる。午後快復の兆しあり、福井を除く5名でジャンダルムにトレーニングに出る。吉川、宮和は右端の凹角からチムニーへ抜け稜上に出て1P半で終了。西川、山本、川瀬はまずT字クラックを目ざしたが登れず、吉川Pのとった凹角を最後まで登り、別のチムニー経の入る程度からリッジに出て、同じ所に抜ける。下降はボルトを支点にしてアプローチレンする。

3月19日　快晴
願ってもないような好天に恵まれ、予定どおりチンネとハッ峰上半に行く。山本、福井両君には気の毒だが三の窓で遊んでもらう。

○ハッ峰パーティ　　西川、川瀬
SH3(7:30)——Ⅳのコル(8:30)——Ⅳ・E(9:40)——Ⅵ・Ⅶのコル(11:00)
ハッ峰の頭(12:25)——SH3(13:00)

天気は一日もちそうだし、上半だけなのでゆっくり出発する。池の谷ガリーには踏跡一つない。ところどころ膝まで没するが概ねクラストである。乗越に雪庇は思く、難なくして長次郎に入る。上部はかなり急なうえ、陽が当たり出し、雪崩を誘発せぬよう気を配りながら下降する。陰にはいるとクラストしており傾斜のおちたところを見はからってシリセードをやるが、ちっとも滑らず、Dフェースの下あたりからトラバース気味にAフェース下を通過してⅣのコルに立つ。六峰フェースは5月のような状態と思われる。Aフェースなどはアイゼンなしで1時間ぐらいで終る出来そうに思え、色気も出てくる。コルは広々として、Ⅴ峰の陰となっている。ゆっくり腰をあげ、陽の当るⅥ峰の雪壁に第1歩を踏みだす。雪はしまっており、鼓先が入る程度で、ピッケルと左手のホールドを作りながら右よりに高度をかせぐ。Aフェースの頭から先三の窓谷側の斜面をトラバース気味に登るが、雪は早くもくさり、膝を没する。六峰フェース側は大きくはないが雪庇が出ており近づけ

ない。Cフェースの頭でアンザイレンして、夏のルートを下降、Eフェースの頭は岩に捨てナワをつけて20mアプザイレンする。稜線はせばまり、完全なナイフとなる。Ⅶ峰をコンテで登ると、15m程の頂稜に出るが、長次郎側は雪庇で三の窓側は垂直に近い雪壁で、一歩たりとも安易には踏み出せない。はうような気持で先端まで行くが、コルに向って雪庇が張り出しているらしく下が見えない。アプザイレンしようと雪稜を1m余り崩すが岩が出ず、三の窓側の70度の雪壁を下降する。ここは幸い北面しており陰の部分であるので雪がしまっていて無事コルに下降出来た。三の窓側はほぼ、気持の良いほど切れている。Ⅷ峰は雪のくさった雪を60mザイルを延ばして頂稜に出るが、下降点を探すもどうしようもなく南端の岩にハーケンを打って三の窓側に20mアプザイレン。そこより40mで小雪庇を越えて、最後のコルに出る。ここでナイフリッジは終って目の前の頭までは、わずか30m程の斜面が続いているだけとなる。一歩一歩楽しむようにコンテで頭に立つ。乗越への下降は所々岩が出ており、少しく怖い思いをする。誰が通ったのかトレースで汚された池の谷がリーを下って昼過ぎSH-3に帰着。予定どおりの半日行動となる。夏にはハーハー言いながらも走って通れるハッ峰だが、雪がつくと、まるで写真に見るヨーロッパアルプスの雪稜のようで十分楽しませてくれる。我々の場合は快晴とトレース一つないという好状件に恵まれての実に楽しいものであった。

○チンネ・パーティ　　古川、宅和

SH-3(8:00) ── 取付(8:30) ── T-5(12:00〜14:00) ── 頂上(16:30)
SH-3(17:10)

左下カンテ・左方カンテを予定し、ビバークの用意をして出発。腰までのラッセルで取付へ。ルンゼ内から宅和トップで登り出す。1P目)、ハーケンに従って人工でハングを抜け、フェースを5m左上してテラスへ。2P目)、カンテから小ピナクルへ、カンテを回り込んで左のルンゼに入る。堅雪。つまってルンゼを快適に登りピナクルのある安定したテラスへ。3P目)、ルンゼ右のフェースを35m。4P目)左方ルンゼに入ってT4まで。5P目)左稜線を20mでT5、左下カンテ取付の人工で4

宿どり、上部は左稜線とする。左稜線には2パーティ先行があり、2時間待ち。まるで夏山だである。 6P目)、ハング気味のところをアブミを使って越え25m 7P目)、チンネの稜線上へ。
8P目)、坊主をこえる。 9P目) 雪がのったナイフリッジ。 10P目)、チンネの頂上へ。 コルからアプローチレン3回で池の谷ガリーに下り立ち、SH:3に帰着。 チンネは5月の状態で、我々の考えていた登攀とはほど遠いものであった(宅和)

3月20日、 吹雪、 停滞
昨日の余勢をかってチンネをもうーパーティ考えていたが、台湾坊主の怒濤で停滞する。

3月21日、 吹雪、 停滞
低気圧の通過で降雪量多く、おまけに雪洞の位置のまずかったことがたたって、入口の除雪作業繁。

3月22日、 吹雪 停滞、
低気圧が太平洋に抜けた後も、勢力圏が広いため、吹雪は一向におさまらず。雪洞の天井がかなり落ち、危険を感じ、荷物をまとめて、外に出、一時ツェルトを被って待機するが、吹雪弱まる気配全くなく、ツェルトが雪で埋まれて、何度も場所の移動を強いられる。移動する際に荷物を雪の中に紛失せぬよう注意を要する。一時間半この状態を続けるが、これでは埒があかないので、西川、山本を荷物の番に残し、4人の待が吹雪く中を、ジャンダルム基部の風の通り道にSH:4を建設。とても目を開けていられない場所である。3時間を要す。新しいSHに移動し、これならまだ4~5日は大丈夫と一息つく。

3月23日、 晴れ
三の窓(7:00) —— 本峰(9:00) —— 仙蔵小屋(11:00) —
馬場島(14:30)

やっと天候が回復する。なんとしても馬場島まで下りてしまおうと、5H.4を終にする。クラストした池の谷カーリーからこれまたクラストした主稜線を快調にとばす。別段ルート工作を要する所もなく、アイゼンをきしませて本峰に立つ。本峰には我々と前後して早月尾根からの登山者が10名ばかり登ってくる。これで早月にトレースのあることが分り、馬場島までの勝算を得る。凡の出だした本峰を後に、早月尾根に下降。上部にはナルメがあり、ピッチはあかる一方である。伝蔵の小屋から先少しラッセルをさせられるがこれも30分と続かず、再び立派なトレースが現れる。樹林の中の滑降コースを滑って転んで馬場島にはずい分早く着くことになった。警察や[illegible]の勧めに従って管理人の下りた馬場島荘に入る。警察氏の命令どおり石油ストーブも使用、明朝、伊折で管理人につかまってもだまってりゃ分らんとのことである。夕方警察の派出所で春場所の千秋楽をカラーテレビで見せてもらう。貴の花初優勝！大いにわく。残ったメシをたらふく食らって畳の上に寝る。

3月23日　小雪のち快晴

まだ暗いうちに出発。昨夜5cmほど積もって、トレースを薄くおおっている。馬場島につくとすっかり晴れあがり、剣がとても大きく輝いて見える。

5。不帰の周辺　75・4～75・5

○参加者
CL、古川道裕(I.IV)、SL 宅和正彦(I.III)、小川邦一(I.IV)
西川義満(I.V)　川瀬亨(I.III)　福井修(I.II)
山本章(教.II)　丸山宇一(教.I)　藤松太一(OB)

○期間
1975.4.29～1975.5.4.

○行動記録

4月29日　曇り
バスで長野から白馬へ行き、車のスキーキャリーに馬鹿にした目で見られながらも、白馬から歩く。3時間半で南俣入の池畔の台地にBC設営。今年は雪が多い。夜大雨

4月30日　曇り
昨夜の大雨もあがり、曇天の下を出発する、5時30分。滝上7時着、2時間雪上訓練して、全員で八方池まで登り、シリセードの調子をみながら、同じルートを下山。

5月1日　晴れ
1) 唐松パーティ　小川邦一、川瀬亨、丸山宇一、
5時半BC発、奥の二俣7時半、唐松沢をひたすらラッセルして、唐松岳に10時半。二峰で古川、宅和と合流し、一峰尾根パーティの終了を見届けて、13時I.II峰間ルンゼをシリセードで下降し、BC帰着16時半、

2) I峰尾根パーティ　西川、山本
奥の二俣で分れて不帰沢を少し入ったところのルンゼから

取付(8:30)、雪壁ブッシュを5ピッチでPIに出る。唐松沢から取り付いた方がはるかに早かったろう。雪稜とはい松こぎでPII、PIIIを通過、断壁は6ピッチで上部雪稜に出、フンテで最後壁基部までたどり、これも木につかまって登りI峰ピークに抜ける(3時半)。I・II峰間ルンゼを滑ってBC 17時帰着。

3) II峰X状ルンゼ、パーティ　古川、宮和

南峰ルンゼから北峰ルンゼに入り、II峰北峰に抜ける。ノーザイルでラッセル、最後の雪壁だけ1Pアンザイレンする。

5月2日、晴れ

1) II峰A尾根(古川、川瀬)
2) 〃　C尾根(宮和、山本)
3) 湯入沢から鎧温泉を経て天狗山荘、不帰I・II峰間ルンゼへ(西川、丸山)

小川下山、OB藤松入山

5月3日、雨、停滞

5月4日、雨
天候回復の見込みなく下山する。

☆個人山行

1。野呂川～大井川東俣のつもりが荒川

○メンバー　世手建設会社 K組へ就職の決ったN君と
　　某三流大学大学院に入学の決ったK君

○期日　S.49年秋某月某日より5日間

○顛末記

ここらよい秋風にさそわれて この沢に入ることとなったのです。酒・肴を買いしたためN君の友人に車で夜叉神まで送ってもらい、ここより歩いて2pich、ダンプに拾ってもらって奥千丈沢まで、あと1pichほどで両俣小屋へ入る。

翌日は雨で沢。秋雨の両俣小屋より、両君黄葉となりかわって酒を飲む。

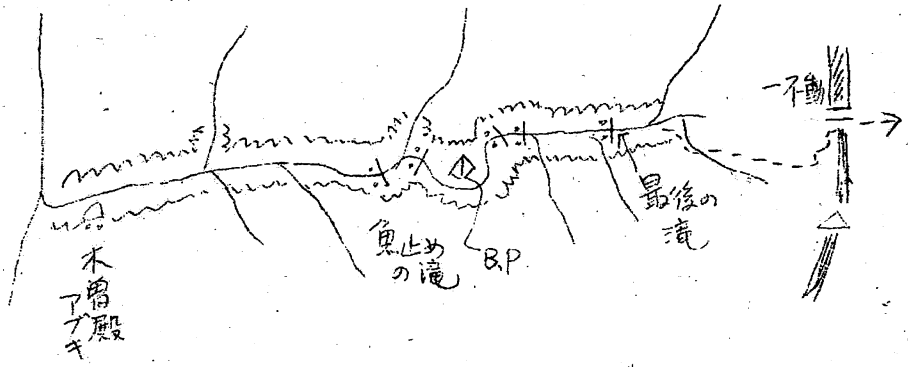
次の日も天気は渋りがち、午前も遅くから出発。荒れた沢の中をだいぶ高度をかせいだようなのでツェルトを張り酒を飲む。終日稜線は見えずじまいでぬれを乾かすため火を燃す。

翌朝は早く出て、一気に池の沢の小屋をめざす。高度を上げるとガスの中で、強風が吹きおまけに一面エビのシッポ。一目散に稜線に飛び出すと、そこには秋の陽光をいっぱいに受けたカールがあったのですよ！ 富士を正面に見て（後で思えば変なのだが）黄色い樺の木の中をいい気なもんで下っていった。N君は夏沢の沢小屋の留守番君から東俣のことを聞き楽な沢だと思ってたのですが、様子がどもちがうのでした。「地図とはどうも合わない」などと言いながら下って行くと決定的な破綻がおとずれました。大ゴルジです。それに取り入口です。それでもまだ2人は半分この沢が大井川水系であることを信じていたのです。（バカな話し）暗くなるまで歩き、最後の証拠を（野呂川林道へ出たのよ）つきつけられて両君は放心状態、それでも近所の飯場のねっかいになって酒を飲み（ヤケ気味で）寝てしまった。翌朝気をとりなおして奈良田より下山。みなさんコンパスは持参しましょうね。

2。裾花川

○メンバー、宅和正彦、福井修

○期日、1974.10.12～13



○行動記録

10月12日、晴れのち曇り

長野を7時発 バスで鬼無里まで入り、あとは工事関係者の車でかなり奥まで乗せてもらう。木曽殿アブキから遡行をはじめる。流れを右へ左への渡渉のくり返し、秋の水はさすがに冷い。上流から釣り師が下りてくるのに出合う。核心部までは、野猿が遊んでいるのにも出くわす。秋たけなわで紅葉は美しく、きのこを取ったり化石を見つけたりして進むとゴルジュ帯に入る。魚止め滝は右岸にそって巻いていき、アブミ3個でこす。地獄谷出合をすぎ、次から次と滝をこして行く。川が方向を変える所に川原があり、ここに泊まることにする。マッタケを見つけて、夕食にそえる。

10月13日、曇り一時雨

8時出発、しばらく単調な川原が続き、再び滝が現れてくる。シャワークライムで直登。最後の滝は右側をトラバース気味に登るが、宅和が水泳を見せる。水量がどんへ減って、最後の分岐から一不動目ざしてヤブをこぐ。濡れた程度り竹をこいで避難小屋着(13時半)、バイカーの熱い視線に送られて大洞沢を下山。

3。明星山　PG南壁左岩稜

○メンバー　　西川義隆　　古川道裕

○期日　　1974、10、20

○山行日記

たまには学校をさぼらない山行もできるんだということを見せたいという発想のもとに行ったものである。谷川岳も考えてみたのであるが関東のクライマーに笑われるのも不愉快だろうと、この明星山となったのである。日帰りということと、初めてということでルートは左岩稜を予定した。

19日(土曜)、授業を終えてから松本へ行き、思誠寮に宿泊する。今にも降りだしそうな曇天のため、アルバイターを募集する寮内放送に誘惑されそうになる。明けて20日、寝不足ながらも朝一番の大糸線に乗り込む。と同時に寝込んでしまう。小滝駅に下車すると、すぐ近くに明星山が見える。ずっと昔、はじめて大糸線に乗ったとき、「おもしろい山だなあ」と思って見たことのありそうな山がこの明星山でした。それはともかく、駅に置いてある登山者カードに記入、見れば、やりそうな山岳会の名が並んでおり、我々は間違った所に来てしまったのでは？という疑念が脳裏をかすめる。しかしそれはまあいいとして、ともかく先を急ぐこととする。国道をそれて行くうち、青空も見えだす。やがて小部落を過ぎると道は林道に変わり、明星山はどんどん近づいてくる。

岩壁はさすがに大きく、先づ屏風岩ぐらいのスケールであろうと判断、しかし進むにつれて、どうやらその程度ではないことが

ポチポチ分ってくる。と同時にだんだん怖くなる。駅から1時間余りでとうとう対岸まで来てしまう。観念してじっくり観察すると、高度差は4～500mはあるうか、正面から見ているせいもあって、殆んど垂直に見える。昨夜は少し雨がふったのだろう、白い石灰岩がところどころ濡れて黒ずんで見える。ちょうどセメントに水をぶっかけたようである。左岩稜は大きな南壁の左端、壁の中程で木の生えた稜に達している。覚悟もでき、小沢を下って河原に立つ。水量が多く靴を脱いで渡渉し、落石の危険があるので即左ルンゼを10m程登って取付のバンドに行く。直後すごい落石があり、ゆっくりすることもできず、古川トップで登攀開始。
1P目)、フリーで右斜上20mから4ムニーとされている凹角を抜け小レッジでビレー。35m。 2P目)、左のリスにハーケン1本打ってアブミにのるとボルト連打でテラスへ、10m。 3P目)左にゆるいスラブを登り、ハング(外傾した壁 7m、ボルト間隔ナシ)をこえ、小レッジへ、30m。 4P目)右上へフリーから人工で失神テラスへ、20m。 5P目)傾斜がおちて松の木テラスまで、35m。 6P目)ルートはバンドを左へトラバースして稜へ出るのだが、何を考えたかこの男、直上し25mでクラックからハングをフリーで越そうとするが登れず、ハーケン1本打って逃げる。7m程下ってから右へ出てビレー、25m。 7P目)、岩は階段状となり木の中にとびこむ、40m。 8P目)木の中をはいずり回って左岩稜に出て終る。ここまで3時間程度。登攀具をしまってゆっくり休む。ノーザイルで登り下すとルート図にある四級の凹角が現われるが、

これを無視してそのまま小一時間も行くと、P6につく。途中できれいな石を一つずつ拾ってザックが重くなり、すっかりへばっている。下降路を求めてしばらくウロウロした後、東稜から左へ土のスロープを下り、アプローチルン1回で右ルンゼに入る。そのままルンゼを下降、アプローチルン3回でドーム南稜のコルへの踏跡に達する。コルをこすと、踏跡もはっきりしだす。ここでマムシに出っくわしてびっくりしたが、噛まれなかった。東壁ルンゼに出ると草の中の踏み分けスロープを滑って転んで小滝川の河原に下り立つ。登りはヨイヨイ、下降はエラかった。左岩稜なら松の木テラスからアプローチルンで壁を下降した方が賢明でしょう。林道を急ぎ、車を拾い、どうにか5時20分の列車に間に合う。直越経由で長野に帰ったのは21時。壁のはじっこだけかじってきたようなもんだが、それでも結構楽しい周遊旅行でした。

☆荷上げ、

1。剣岳・三の窓（春山用）

○メンバー、L.古川道裕、加賀瀬豊彦、足和正彦、
福井修、

○期間　1974.10.30 ～ 11.2.

○行動記録

10月30日　晴れ　のち　くもり

一斗缶3ケとガソリン8L。毛勝から車で扇沢へ行き、黒四ダムから内蔵助平を経て真砂山荘まで。

10月31日　くもり　のち雪

加賀瀬を除く3名で三の窓に荷上げ。

11月1日　雪で停滞

11月2日　くもり → 雪 → 晴れ

剣沢を登り、別山乗越から室堂に下山。

2。前穂高（冬山用）

○メンバー、L.西川義満、野口彰、川瀬亨、
山本章、

○期間　1974.10.30 ～ 11.2

○行動記録

10月30日、晴れのち曇り、夜みぞれ
秋本から無沢に入山。

10月31日、曇り
11月1日　曇り
1斗缶4ケとガソリン8ℓを上げるのに、どうして二日もかかったのでしょうか？
ピークに荷を置き地面から2mの棒に赤布をつけたが冬には全部埋っていた。

11月2日　曇り
下山。

☆ 1975年度 SNAC構成員

1) 顧問教官

○教育学部　小林 詢

○工学部　増山安男（工学部・基礎力学教室）

2) 監督

藤松太一（上田第一中学教員．教育学部OB）

3) 部員（松本の新入生は含まない）

氏名 生年月日	所属学科 学年	部	現住所 帰省先	血液
秋田敬典 S24.9.23	教・中技 4年	Ⅲ	長野市西長野信大曙寮 32-3770 東京都葛飾区亀有4-31-11 03-602 5917	AB
加賀瀬豊彦 S25.12.19	工・研究科 1年	Ⅵ	長野市稲里町中氷鉋531 大屋方 84-3474 神戸市兵庫区水木通6-2 072-575 9369	B
西川義満 S27.7.30	工・土木 4年	Ⅴ	上記 加賀瀬に同じ 奈良県北葛城郡上牧町1172 07457-7 5217	O
小川邦一 S27.5.16	工・工化 4年	Ⅳ	長野市若里荒木町361-1 酒井方 26-4203 横浜市保土ヶ谷区坂本町250-1 045-332 2721	A
乙 古川道裕 S27.12.7	工・工化 3年	Ⅳ	長野市七瀬 木次方 鹿児島市長田町21-20 0992-22 8637	O
川瀬亨 S28.9.29	工・土木 3年	Ⅲ	上記 古川に同じ 新潟市笹口1-19-1 0252-45 6645	AB
宅和正彦 S29.7.23	工・合化 3年	Ⅱ	長野市若里1100 阿部方 26-0724 広島市宇品東1-4-27 0828-72 2785（佐藤）	AB
福井修 S28.11.25	工・土木 4年	Ⅱ	長野市七瀬679 石山方 26-0639 神戸市東灘区御影本町4-3-19 078-811 2154	O
山本章 S29.4.25	教・小・社 1年	Ⅱ	松本市蟻ヶ崎 信大こまくさ寮（松本）35-8966 佐賀市末広2-2-13 09522-3 7488	A
丸山宇一 S28.12.25	教・中・社 4年	Ⅰ	長野市七瀬607 角倉方 26-6542 松本市内田2174 松本平有線(02)5957	AB